

## 糸魚川市駅北大火の概要

### 被災地域の特性

糸魚川市の中心市街地で ある糸魚川駅北側に位置し、都市計画では、商業地域（容積率400%、建ぺい率80%）及び準防火地域に指定されている区域に含まれている。

本地域の都市構造上の特性として、幅員が4メートルに満たない狭い道路が多くあったことや間口が狭くて奥行が長い町屋風の木造家屋が密集していたなど、現在の法律の基準に適合しない建築物も多く残っていた。

また、フェーン現象時の乾燥した南風や冬季の北西の季節風などこの地域特有の強い風が吹く日がしばしばある。

### 災害の概要

今回の大火は、平成28年12月22日10時20分頃に発生し、翌23日16時30分の鎮火に至るまでの約30時間にわたる大規模な火災となった。乾燥した南からの強風にあおられ、延焼や飛び火などにより火元から約300メートル離れた日本海沿岸まで燃え広がり、火災としては初めて被災者生活再建支援法（風害による）が適用された。

日 時	平成28年12月22日10時20分頃～翌23日16時30分
出 火 場 所	糸魚川市大町1丁目2番7号のラーメン店
焼 損 棟 数	147棟（全焼120棟、半焼5棟、部分焼22棟）
焼 失 面 積	約4ヘクタール（40,000㎡）
負 傷 者	17人（一般2人、消防団員15人）
被 災 者 状	145世帯、260人、56事業所



本町通りでの消火活動



焦土と化した市街地

## 取り組みについて所感等

### 災害に強いまちづくり

- 広いエリアにも関わらず、消火栓の水系が2系統しかなかった。消防車の台数が多くても、水圧が上がらず、強風に押され気味で、十分な消火活動が出来なかったようである。

対策＝海水の利用など、水源確保の方法を検討しているようである。

- 道幅が狭い箇所が多くあり、十分な防火帯となりえなかった。また、消防活動においても、狭さが災いした。

対策＝復興に合わせて、区画整理を行うなど、延焼対策を含む消火に強い街並みを形成しようとしている。

- 古い家が多く、耐火構造になっていなかったため、被害が拡大していった。

対策＝町全体で防火性を高めた建築を進める。特に、道沿いの建物は、耐火性を重視し、道路と合わせて延焼遮断帯を形成する。

### その他

- 「①災害に強いまち②にぎわいのあるまち ③住み続けられるまち」の3方針に沿っ

て、研究・検討・実施に頑張っている様子が見える。

## 概要

### 地震発生

平成 16 年 10 月 23 日午後 5 時 56 分、新潟県中越地方を震源とした、マグニチュード 6.8、震源の深さ 13 キロメートルの直下型地震が発生。山古志村（当時）は、震度 6 強という強震に見舞われた。

頂上から山肌が崩れ落ち、集落のいたるところを土石流がのみ込み、住宅や車を押し流した。山古志へ通じる道や各集落をつなぐ道が寸断され孤立した。電話線も切断され、携帯電話の鉄塔も倒壊し、暗闇の中で山古志は陸の孤島となった。地盤の弱い山あいの村の被害は壊滅的なものであった。

約 2,200 人の住民や観光客は 25 日の救出までの 2 晩をそれぞれの集落で身を寄せ合って過ごした。ただ 1 つ救いだっただのは、山古志には狭い山間の地で住民同士が助け合って生きてきた歴史があったことである。みんなで焚き火を囲み、ご飯を炊いて分け合い、肩を寄せあいながら、人と人とのつながりで 2 日間を乗り越えた。

### 住民避難

当時の村長は翌日、2,200 人全住民の、長岡市（翌年 4 月に合併）への避難指示を決定し、県に救助を要請した。家も田も畑も鯉も牛もすべてを置いて村を出ることを強いるという苦渋の決断であった。

25 日の夜明けからヘリコプターによる住民の輸送が始り（道路が無くなった山古志村からの避難はヘリコプターしかなかった）、その日の午後 3 時には無事故のうちに全住民の避難が完了した。

### 避難生活

住民たちは翌年 4 月に合併が予定されていた長岡市へ避難した。始めのうちは食事も満足にいきわたらず、トイレの数もたりず、さらに共同生活のストレスで体調を崩す人が多くいた。

余震もおさまりつつある 10 月の終わりに、一世帯 1 人 2 時間の一時帰村が行われた。

11 月に入ると長岡市内に仮設住宅の建設が着工された。1 ヶ月後の 12 月 10 日には仮設への入居がはじまった。体育館での避難場所も、仮設住宅の住み分けも、山古志のコミュニティを崩さず、小中学校も市内の学校に間借りする形で再開された。集落ごとにまとまっていることでだれも孤独にならないよう、住民同士が助け合い、支えあっているようにという配慮からであった。

※山古志全集落の避難指示が解除されたのは地震発生から 2 年半後の平成 19 年 4 月 1 日のことであった。

### 水没する集落

木籠集落では、地震による地滑りで堰き止められた芋川がダムとなり、全 24 世帯のうち 14 世帯の家が水没した。家ばかりでなく、田んぼや牛舎も水に沈み、水没しなかった家も全半壊の被害を受けた。

この地区は、下流への被害を食い止めるため、自然堤防として家々を水没させたまま保全し、さらに奥を 3 段のコンクリートで補強し、砂防ダムとして使用されることになった。長岡市は、木籠の一角に約 4,000 平方メートルの宅地を造成し、集団移転を決めた。

## 所感

- 住民同士の日ごろの良好なお付き合いが、苦境のおり、その苦しみの緩和に役立っていた。最も重要なことであり見習うべきところである。行政として、積極的に施策に取り組んでいくべきである。
- 火災防止のための、ガス元栓・電気ブレーカーなどの行動は行政も行ったようであるが、香美市においては、職員数から考えて不可能である。自主防・自治会にお願いし、徹底していくべきではないか。
- 首長の決断力、またその支援要請に対し素早く対応した新潟県・長岡市・自衛隊・その他各団体等は素晴らしく思う。  
災害に対して、広域での対応の重要性を感じ、その効果の大きさに学ぶべきである。



## 長岡市（旧山古志村）

年月日	山古志の出来事	備考	
平成 十六 年	10月23日	17時56分 地震発生	21時02分 県から自衛隊派遣要請
	10月24日	6時00分 山古志村中越地震災害対策本部を設置（山古志中学校グラウンド）	10時00分 全住民避難勧告発令 ヘリコプターにて長岡市内に避難開始
	10月25日	終日 午前6時から長岡市7ヶ所に避難終了（全住民2,167人）	9時00分 避難指示に切り替え 15時00分 災対本部を移設（長岡地域振興局）
	11月3日	避難所の住民を集落ごとに再編	
	11月8日	山古志村役場長岡事務所を開設（幸町分室） 小中学校再開（南中学校、阪之上小学校）	
	12月10日	仮設住宅入居開始 3ヶ所、集落ごとに区分	陽光台（12集落、327世帯） 新陽（1集落、178世帯） 青葉台（1集落、122世帯）
	12月22日	仮設住宅入居完了	
平成 十七 年	12月23日	山古志村仮設住宅入村式（国営越後丘陵公園）	
	3月21日	山古志村閉村式（青葉台小学校）	
	3月22日	役場長岡事務所の移設（長岡ニュータウンセンタービル内）	
	4月1日	長岡市と合併	
	5月4日	闘牛大会再開（長岡市東山ファミリーランド内臨時闘牛場）	
平成 十八 年	7月22日	一部8集落避難指示解除	種苧原・虫亀・竹沢・間内平・菖蒲・山中・桂谷・小松倉
	10月5日	山古志支所現地事務所開設（建設課4人体制）	
	5月8日	山古志支所現地事務所拡充	山古志地域内で行政窓口業務の一部を再開
	7月4日	虫亀診療所再開	
	7月6日	種苧原診療所再開	
	8月12日	油夫避難指示解除	
	9月1日	山古志支所開所式、山古志歯科診療所再開	
	9月3日	国道291号線開通	
	9月6日	山古志診療所再開	
	9月17日	闘牛サミット記念闘牛大会（山古志闘牛場）	
平成 十九 年	9月26日	山古志地域福祉センター なごみ苑再開	
	10月23日	震災2周年追悼式（山古志会場、仮設会場）	
	10月30日	山古志小中学校授業再開（合同新校舎）	
	12月19日	山古志地域罹災者公営住宅の鍵引渡し式	種苧原・竹沢・桂谷
	12月31日	新陽・青葉台仮設住宅閉鎖	陽光台仮設住宅に集約（14集落181世帯）
	3月12日	感謝の日除幕式（国営越後丘陵公園）	
平成 十九 年	4月1日	池谷、檜木、梶金、木籠、大久保避難指示解除	
	6月23日	能登半島地震応援ツアー（～24日）	義援金の贈呈、全仮設住宅の慰問、観光・観光PRの応援

## 長岡市（旧山古志村）

7月21日 中越沖地震被災地 刈羽村で炊き出し

10月21日 やまこしありがとうまつり

10月23日 震災3周年追悼式（山古志会場、仮設会場）

12月23日 やまこし帰村式・感謝の集い  
国営越後丘陵公園・陽光台仮設住宅）

12月31日 陽光台仮設住宅の完全閉鎖

ゆきつばき交番閉所式

山古志災害ボランティアセンター仮設事務所の閉鎖

# 香美市議会議員行政視察報告書

下記のとおり研修を行いましたので、報告します。

1、研修年月日・・・平成29年11月1日～3日

2、視察研修先及び研修内容

新潟県糸魚川市・・・駅北の復興計画について

(日時)平成29年11月1日 13:30～15:30

新潟県長岡市・・・旧山古志村油夫で発生した中越地震による土砂災害における早期復旧に向けた取り組みについて

(日時)平成29年11月2日 13:30～15:30

## ※「1」 1日目 糸魚川市

糸魚川市の火災については、平成28年午前10時20分ごろ出火し、フェーン現象により、南風最大瞬間風速27.2mという強風を記録し、147棟、約4万m<sup>2</sup>が焼失するという大規模火災となった。

当地は、江戸時代から何度も大規模火災が発生しており、地形的な特徴がみられる。今回の火災は、強風にあおられた飛び火により被害が拡大したものであるが、路地が多く、雁木造りの商店街や木造住宅の密集地域であった。

東西に片側1車線道路があり、通常であれば防火帯としての機能も期待できるが、今回の強風下では全く役に立っていない。

市の復興計画によると、市が土地を買収して区画整理をしたうえで再整備するとのである。

### 考察

本市の場合、旧土佐山田市街地では都市計画に問題があり、以前からの南北の小路が数多く未改修のまま残っており、消火活動に妨げとなり大規模な火災に発展する危険性がある。

このため、きわめて困難ではあるが、今後の対策として市街地の人家密集地域の整備について真摯に検討すべきである。

そのうえで、耐火性に優れた建物構造とすべきである。

## ※「2」 2日目 長岡市旧山古志村

平成16年10月23日・17:56分、最大震度7強の新潟県中越地震が発生した。

旧山古志村では、面積約40km<sup>2</sup>に当時14地区、690世帯、2,167名の住民が居住していた。(H29年現在、430世帯、1,050名)道路、公共施設、斜面崩壊、人家等が被災し、大規模な被害が発生した。

旧山古志村では2日間の野宿生活を送り、村長の決断で全村避難を実施したが、合併を控えた長岡市の協力が大きく、体育館等を避難所として迅速に開設することができている。

翌年12月には仮設住宅への入居が完了している。ただし、地域住民がバラバラに入居したため、集落ごとにまとまって入居できるよう再度計画を変更しているが、比較的スムーズに実施できたとのことである。これは、避難住民の人数が比較的少ないこと、そして長岡市という大きな市が近隣に存在しているということも、大きな要因ではないかと思われる。

地震発生が土曜日の午後ということで、多くの住民が長岡市へ食料等の買い出しに出かけており、村全体で大きな被害が発生したが直接の人的被害はなかったのは幸いであった。豪雪地帯特有の頑丈な家が多く、土台から崩れたケースは少なかったとのことである。防災行政無線の復旧には2年かかっている。

### 考察

本県では、南海地震による大津波の発生により沿岸部が壊滅的な被害を受けることが想定される。その場合津波が到達しないとされている本市には、多くの避難民が殺到することが予想されるが、避難場所、仮設住宅の建設地が公共用地では絶望的に不足する。

平場はほとんど農地になっているため、民地を借地する以外に確保は困難である。平時から民有地の借地について、固定資産税、作付け補償等についてどういった対応が可能であるか、避難民数を想定したうえで早急な計画を策定することが肝要である。